授受表現「クレル」を使った皮肉・非難表現について

―「クレル」の恩恵性を再考する―

尾　鼻　靖　子

Ⅰ　はじめに

やりもらい表現といわれる「やる・くれる・もらう」などの授受動詞や助動詞は、これまで「恩恵性」を所有しているというのが定説となっている。また授受表現には話し手が自分を下位に置くことで相手を持ち上げている要素があるため、一種の待遇表現あるいは敬意表現の一端とも判断されることもあり、「上位者の恩恵」（日高，2011）という言葉で表現されることもある。ゆえに、授受表現をポライトネスの観点から分析する研究も多い。一方で受け手にとって好ましくないもの、否定的なものを授受した場合には「非恩恵性」があると判断されるのであるが、授受表現の基本はあくまで「恩恵性」である、というのが従来の説である。

本稿では、「くれる・てくれる」（以下「クレル」と表記）表現を使って皮肉を表したり非難を暗示・明示したりする例を基に、「クレル」が果たして「恩恵性」を基本的に所有するのかどうかを検討したい。恩恵を表す例を分析する研究がほとんど占める中、「クレル」の否定的な使い方は常に参考程度に述べているだけで、掘り下げて分析されたことはあまりないようである。

筆者は、「クレル」には「敬意」や「恩恵」「感謝」などの価値判断や感情的判断というのは本来備わっているものではないと考える。そういう判断はコンテクストや話者の意図が絡んではじめて感じられる結果としての解釈であると主張する。

日本語の文法要素として話者の視点（森田，1995; Obana，2000：113-185）というのがあるが、「クレル」も話者の視点がどこにあるのかを示す言語単位である。現代語の「クレル」の基本はこの文法規則にあり、「クレル」の使用は構文の構成上義務付けられることが多い[1)]。しかし、「クレル」の起源である「上から下へと移動する」という lexicon における語彙上の意味は現代語にも存続しており、この「上から下への移動」を、コンテクストごとに話者が自分に起こったことをどのように捉えて使用するのかという状況判断が

1）例外はある。例えば「だましてくれたな」「よけいなことをしてくれた」など否定的な表現では「クレル」は義務づけられない。「いいこと言ってくれた」のように「いいこと」を言った方向が話し手であるかどうか明確でない場合も義務化されていない。「クレル」使用の義務化については、さらに検討する必要がある。

結果として「恩恵」や「皮肉」「批判」という解釈につながると筆者は考える。

Ⅱ　「クレル」の歴史的背景

宮地（1999）は、源氏物語に現れる受給表現を調査することで、源氏物語のころはいわゆる授受表現（てもらう、てくれる、やる）が使用されていないので、事態の把握の上に立つ受給的認識はなかったのではないかと述べている。例えば、「わかってもらえなくて残念だ」と現代語で言うところを源氏物語時代だと「え思ひ知らぬなむ口をしき」とか「え思ひ取らぬこそ口をしけれ」と言ったのではないか（宮地，1999：196f）と推測している。つまり、授受表現に関しては、中古の時代のほうが現代語よりも単純でストレートな表現をしていた、と言うのである。

では、どの時代から授受表現が現れ始めたのかと言えば、例えば動詞の「くれる」は、中古の時代にはすでに動物も含め身分の低い者に物を与えるという意味で使用されており、上位者から下位者へ移動する動詞と解釈されていたようである（日高，2007; 前田，2001; 宮地，1999; 森，2016; 李，2013）。ただし、森（2016：67）によれば、中古時代でも、あまり例がないとはいえ、すでに身分の上下関係に反して「臨時的に与え手を上位者として扱う配慮」を反映した文献もあるということである。授与補助動詞である「てくれる」は、大体15世紀半ばには成立したと言われているが、はじめは「くれる」と同じく上位者から下位者に授与する形で使用され、上位者が主語（行為者）となって相手（下位者）をおとしめたり、攻撃したりする文脈で用いられることが多かったようである（森，2016：76）。中世以降になると、話し手を上位に置くような表現を避け、相手が上位であろうとも下位であろうとも、相手を上位として扱う表現が目立ってくる。荻野（2007）や前田（2001）によれば、相手に依頼する表現として「てくれる」を使うようになったという。

森（2016：93）は、「クレル」は中世末期では恩恵的認識を表す語句とともに使用され、「現代語と同様、話し手に向かう恩恵を示す」ことが基本的意味になったと述べている。ところが、近世後期になると「『てくれては恨みだ』の形で、当該の動作に非恩恵的な認識をしていることを明示」する例が見られるようになり、それを森（2016：94）は「恩恵の意味が希薄化されて用いられるように」なったと説明している。

Ⅲ　「クレル」に関する先行研究

これまで「クレル」の研究は、「恩恵性」を基本とし、その流れで敬意表現の一環として扱う方向が主流である（橋元，2001; 原田，2006; Hasegawa，2015; 日高，2007，2011; 井出・イム，2001; Ishiyama，2009; 益岡，2001，2007; 松尾，2013; 森，2015; 山本，2002，2003）。まず、「クレル」の恩恵性について考察する。ここでは「恩恵性」は「自分

にとって利益がほどこされること」ばかりでなく、「話し手にとって好ましいもの」「感謝の念が起こるもの」「配慮」と拡張して考えることにする。

益岡（2001）は、

（1）？即座にイエローカードをくれた。

という文は認容不可能である、その理由として、通常好ましくないものと「くれる」は相いれないからとし、「くれる」の恩恵性を主張している（のちに益岡［2007］は、授受表現を「恩恵構文」と命名している）。しかし、コンテクストによっては例（1）も認容可能である。例えば、イエローカードを受け渡されたことに不満を持つ選手がのちに他の選手に

（2）あのレフェリーさ、即座にイエローカードをくれたんだよねえ。

と、皮肉たっぷりにいうことで、自然な発話となる。つまり、授受対象（イエローカード）が好ましい好ましくないという分別が「くれる」の生起に必ずしもつながるものではないのである。

同じように認容性の面から、森（2015：27）は次の2つの例における認容性の高低の差を「授与される対象物に対して受け手（話し手）が感謝を感じられるかどうかに起因する」と考える。つまり、例（3）のほうが（4）よりも感謝を感じる程度が高いので、認容度も高いというのである。

（3）彼が私の好きな本を買ってくれた。

（4）？？彼が私の嫌いな本を買ってくれた。

コンテクスト無しに一文だけを提供されると、確かに例（4）はなんとなく認容性が低いように思われるが、これも発話の場面や対話の流れによっては認容性が高くなる。

（5）ほんとは、ハリーポッターの本がほしかったのに、彼はいじわるしたんだとおもう。これ、読めって、私の嫌いな本を買ってくれたんだよね。もうそろそろ別れ時かな。

例（5）のように状況説明が付加されるとより自然な発話となる。この文では、「クレル」は文法上の規則として義務的使用をしているのであるが、もし声のトーンや顔の表情などが加われば、皮肉や迷惑の気持ちを強調していると判断することも可能である。しかし、この発話には「恩恵性」は感じられない。だから、感謝を感じようと感じまいと、「クレル」は使用され得るのである。

さらに森（2015：28）は、話し手が迷惑を感じている場合に使われる「クレル」にも言及しているが、「迷惑のニュアンスは、あくまで感謝の気持ちを前提とする『ありがた』迷惑」と解釈している。その例として、

（6）よくもだましてくれたな。

（7）彼は取り返しのつかないことをしてくれた。

という発話を挙げている。しかしながら、「ありがた迷惑」というのは、相手が良かれと

思って行ったこと、あるいは一般的には親切だと判断される行為が、受け手には（結果として）迷惑であるという意味を持つ。つまり、話し手がそのように感じる心理には、相手の親切や好意を一応認める一方で自分の正直な感情を上乗せする二重構造が見受けられる。しかし、（6）の「だました」という判断は「ありがた迷惑」からほど遠い直接的な非難であり、しかも「よくも」は非難の言葉を強調する副詞である。（7）の「取り返しのつかないことをした」という言葉も話し手が窮地に陥った様子を如実に表している。このような言葉の選択には「ありがた迷惑」が持つような二重構造心理はなく、例（6）と（7）はどちらも直接的で強い非難である。

また、「ありがた迷惑」であると判断するのであれば、どのようなつもりで相手や第三者がどんな行為をし、結果はどうなったのかを示すコンテクストが必要である。一文だけではありがた迷惑の二重構造心理を抽出することはできないからである。

例（6）と（7）に使われている「クレル」は、「クレル」の起源である「上から下へと授与する」という意味を利用して、話し手が自分をわざと下位に置き、それがあたかも相手（あるいは話題の第三者）が自分を貶めたかのように表現しているのではないか、と筆者は考える。例（6）と（7）はいずれも「クレル」がなくとも文法上成立する構文である。「よくもだましたな」「取り返しのつかないことをした」というだけでも充分非難の発話として成立する。つまり、「クレル」の有無に関わらず、例（6）と（7）はすでに否定的感情を提示しているのである。そこにあえて「クレル」を付加することによって自分は下位として扱われ貶められたのだと暗示しているので、非難感情を一層強める効果が生み出されるのである。つまり、ここでの「クレル」は恩恵性からはほど遠く、否定的感情を強調していることになる。話し手が自分を下位として扱うのは、他のコンテクストでは謙虚を表す敬意表現であるが、その使い方によっては攻撃的な非難や相手が応対できないぐらいの皮肉を表すことができるのである。

以上のように、「クレル」構文は、コンテクストや話者の意図によって「クレル」のもたらす解釈は恩恵にもなるし、皮肉や非難にもなる[2)]。山本（2002）は、「クレル」の機能をいくつかに分けて分析しているとはいえ、話し手が恩恵を受けていることを示す機能が「クレル」の本来的用法であると主張している。一方で、「非恩恵性」は文脈によって生じる（山本，2002：135）と述べている。しかし上記で記したように、恩恵性か非恩恵性かという判断はどちらも文脈によって生じるものであって、これは「クレル」だけに限らずどの言語単位にもあてはまる事実である。敬語もその言語形式がそのまま敬意を表すのではなく、それの使い方によれば、皮肉（Okamoto，2009）や冷ややかさ（Barke，2011）を表現できるし、相手に対して弱い立場が敬語を使うことで力関係を証することもある

2）豊田（1974：83）は、「とんでもないことをしてくれたなあ」などの否定的な文を例に、「話し手がある行為をそう受け取り、話し手の側からそう評価したにすぎない。それを逆に主体が私に向かってそのようにしたと表現している」と述べている。授受表現をどのように分析するのかという点までは言及していないが、話し手の主観的判断は結果であって授受表現に備わっているものではないとする研究は豊田以外なさそうである。

（メイナード，2001）。Jautz（2013）によればthank youという言葉もコンテクストによっては相手が話し続けるのをやめさせるシグナルであったり、皮肉にも冗談にも使用され、その決まり文句（formula）に感謝の意が本来備わっているわけではないことを指摘している。どの言語においても我々は限られた言語単位を状況場面、対人関係、話し手の意図などに応じて様々な語用論的意味を持たせて使用している。ただ、たとえばthank youという決まり文句は感謝を示すことが頻度として多いだけである。「クレル」も筆者が調べたドラマや映画の中で「恩恵」や「感謝の意」を示す頻度は高く、皮肉、非難などの否定的な意味を示す「クレル」構文は比較的少ない。しかし、だからといって「クレル」が恩恵性を所有すると結論するのは短絡的である。

最後に「クレル」をはじめとする授受表現が日本人特有の微妙な人間関係を認識している証であると主張する研究について考察したい。井出・イム（2001：45）は、感謝の言葉や敬意表現を使わなくても「クレル」を使用することで話者の感謝の念が感じ取られるとする例を挙げて、「そこに関わる人と人との間を恩恵という見えない糸で繋ぐがごとくの機能を果たしている」と説き、「クレル」は「微妙な人間関係を反映させた表現」と結んでいる。また、橋元（2001）も授受表現は「受けた恩恵への返礼義務を含意するような表現」（橋元，2001：48）と述べ、「日本的授受表現は、心理的な貸し借りを言語化し、それによって緊密な関係を維持するための生活の知恵であり、気配りに関する普遍的な言語習慣の一部が特殊な形で発達したものである」（橋元，2000：51）と結論する。同じように森（2015）は「恩」は日本文化固有の社会文化的概念とし、それが「クレル」に反映されていると論じている。さらに山橋（1999：98）は、「他の異文化的価値とは異なる」ものとし、「日本人に特有の感情」とまで主張している。宮地（1999：209）は、古代の敬語体系が単純化していった現象を補うかのように授受表現が発達したという点について、「日本人は、…古来微妙な人間関係の認識とその表現を好む性格がある」と説明している。

以上は70年代ごろからさかんに論じられてきた「日本人論」を彷彿させるが、果たして「クレル」（ひいては授受表現一般）というひとつの言語単位が日本人の微妙な人間関係や気配り、受けた恩恵への返礼義務までも反映するものであろうか。そしてそれらの心の動きを日本文化固有と断言できるものなのだろうか。

一方で、森田（1995：179f）は、「クレル」は「対自己との関係で評価しながら事を遂行しようとする姿勢」を示し、それによって他者との関わりに「常に自己にとっての利益・不利益として眺める利己的な姿勢がつきまとう」ものだとし、「貸し借りソロバン勘定も生まれる」とも述べている。上記の「恩恵」という美的解釈は、異なる観点から見るとこのように「自分中心に物事を測定する」とも取れるのである。しかしどちらが正しいというのではなく、どちらも主観的な意見に過ぎない。「クレル」そのものにはそのような日本人の特性、国民性、あるいは主観的判断というものが固有の特質として存在しているわけではない。「クレル」を使用したときの状況、立場、対人関係、そして話者の判断

が「恩恵」となったり「批判」となったりするのであり、どのような使い方も可能である。日本人が微妙な対人関係を認識する国民であるというのも、学究的な調査の結果ではなく、個人の主観的意見に過ぎない。それをどのように立証できるのかも記していないし、世界の言語をどれほど詳細に調査した結果なのかも述べていないのであって、まったく根拠のない所説だからである[3)]。繰り返すが、「クレル」そのものには「恩恵」や「微妙な対人関係」などを示す要素はない。例えば、次のような発話で「クレル」が日本文化固有の微妙な人間関係を敏感に捉えているといえるだろうか。

（8）なんで起こしてくれなかったのよ。完全に遅刻じゃんか。

（9）ケチ！お金貸してくれたっていいじゃない。後で返すって言ってんだから。

（10）なんか女房が気づいたみたいなんだ。もう別れてくれないか。

これらの例では「クレル」を使う背景には自己中心的な期待を全面に出すことで相手がその期待通りに行動することを前提としている。「別れてくれないか」は一見丁寧に依頼しているようであるが、別れてくれたら話し手に「利益」があるという意味はあっても相手に対して恩恵を感じて返礼の義務を込めた発話ではなさそうである。

周知のように、日本語には第一人称「私」が存する現象を描写する時には話者の視点は「私」にまず置かれる。そこから話者にとって社会的にもっとも近しい関係の人から順に話者の視点が拡張（移動）され（それを Obana［2000］は‘assimilate’［同化、融合］と描写している）、話し手はその視点から現象を眺める。そういう社会的関係がない場合は、話者が心理的に近しい、あるいは話者の決定によって（物語の作者はその典型例）第三者に視点が移り、その視点から現象を言語に表すという特徴がある。筆者は今までの調査で日本語のような視点を持つ言語に未だ出合っていない。他の言語では、話者の視点は描写の対象となる現象の外に据えられており、「私＝現象の経験者」と「話者＝視点」は、別々になっている。しかし、どの言語においてもどこに視点があるかに関わらずこの「視点」は文法要素であり、文構成のバックボーンとして機能している。

だからこの文法的視点と、個人の観点とか主観的感情とかいう心理学的要素とは別のものとして扱うべきであるが（英語のような視点が客観的とか神の視点というのが誤っているのと同様である）、日本語は話者の視点がまず「私」にあるため言語学的分析と心理的（あるいは主観的）分析とが混同されることが多いようである。たとえば、森田（1995）は、日本語の視点が機能している言語現象を多岐にわたって分析しているにも関わらず、ところどころで、ある言語単位が持つ文法的視点と、発話に対する主観的判断とを混同していると見受けられる箇所がある。そして日本語の文法上の視点を、話し手の主観的視点

3）恩恵を表す方法はどの言語にも存在しており、山田（2011）によれば韓国語、カザフ語、ヒンディ語、モンゴル語、ネパール語には、恩恵表示の補助動詞が文法要素として存在しているということである。また、補助動詞を使わずとも恩恵を表す方法はいくらでもある。He kindly offered me help. という文には、kindly という副詞で話し手が感じる恩恵を表し、offer me は自分に向かっているという恩恵の方向も示している。日本語の「クレル」構文と大差のない文である。その恩恵に返礼の義務を感じるかどうかは個人的な判断の問題であって、言語学の分析対象ではない。

と同レベルで捉え、それがひいては日本人の特性とまで主張している。例えば、「自己の視点を抜きにした客観的な状況設定ということが日本人は苦手なのである。… 日本語は、事態を突き放して、そとから傍観する態度でものを見ない」（森田，1995：174）。さらに敬語に関しても、ウチとソトを分ける現象であるので、それを「自己のなわばりに頑なに固執し、『井の中の蛙』的になかなか他人をその中に受け入れようとしない日本人のいやらしさ」（森田，1995：192）とまで判断し、かなり主観的な意見が見受けられる。話者の視点に基づく文法構造を日本人の心理、国民性にまで適用するのは、かなりの飛躍があると思われるが、上述の「クレル」でもって日本人の人間関係の捉え方まで言及しているのと同じレベルである。

次の章では、「クレル」の持つ基本的な文法要素「話し手中心の視点」をまず捉え、様々なコンテクストで異なる解釈が成立することを明確にしながら、否定的感情を表す例を中心に「クレル」構文の分析を行う。

Ⅳ 「クレル」と皮肉、非難、迷惑

1.「クレル」の基本：話者の視点を表す言語単位

「クレル」は日本語の「話者の視点」を明確に表す言語単位のひとつである。だから、次のような発話は話者の視点から眺めると対象となるものが話者に向かっていることを「クレル」が示している。

（11）昨日、電話してくれたんだって？

「クレル」は、行為の方向が話者に向かう表現にはほとんどの場合使用が義務づけられている。「電話したんだって？」では、話し手以外の人に電話をしたことを示すので、話し手にかけてきたことを表すには不適当である。次の例を見てみよう。

（12）それから巡査は、返事をもらうときに気をつけることを、いろいろとボクに教えてくれた。（『天誅』：p378）

この文だけでは、「クレル」文は恩恵のように感じられるが、この物語では巡査が「ボク」の学校の教師に恐喝を行うくだりで、主人公である「ボク」にその使い走りをさせるために、その手順を主人公に教えるのである。このようなコンテクストがあると、例（12）の「クレル」は恩恵ではなく、単に教えるという行為が話し手である「ボク」に向かっていることを示していることが分かる。

もうひとつ例を挙げよう。

（13）サイコメトリーとは、…　たとえば霊覚者に一本の万年筆を渡しますと、… 万年筆が過去に経てきた歴史などを、霊感で知って話してくれるのです。（『爪占い』：p295）

この例でも、霊覚者が、誰であっても訪ねてくる人に霊感で知ったことを伝えるという事

実を述べているだけである。話し手がその場面に居るか居ないかは問題ではなく、話し手が霊覚者に話を聞く想定上の人物に視点を移して（あるいは同化して）その視点から描写をしている。霊覚者の話が聞く人にとって「恩恵」となるか「迷惑」となるかは、聞く人それぞれの判断に任されている、つまり結果としての解釈に過ぎない。

「クレル」の基本的文法機能を明確にするために「クレル」が「恩恵」と直結しにくい例を上に挙げてみた。現代日本語では、「クレル」にもともとあった「上から下へと与える」身分の上下を明確に表す意味は廃れているが、上の三例にも「上から下へ」というニュアンスは見当たらない。「上下」は廃れても自分の方向に現象が向かうというベクトルは残っていて、それを話し手がどのように捉えたのかというのは、コンテクストや話し方などで明らかにされる。しかし、「クレル」の使用が義務的でない文では、話者の何等かの意図が含まれていると考えられる。

（14）今年はよく雨が降ってくれた。

（15）私が作ったものを子供たちがおいしい、おいしいって食べてくれるとうれしい。

例（14）は雨が降ったという事実が、話し手にとって利益なのか迷惑なのか、この一文だけでは分からない。状況説明を付加することで明らかになるが、文法的には使用が義務付けられていないだけに、「クレル」が話し手の主観的判断を前面に押し出す効果をもたらす。一方、例（15）も「クレル」を使わなくても成立する文である。状況的には「子供たちが食べる」という行為が話し手に喜びをもたらすことを描写しているのである。もともと子供たちが食べるという行為は話し手には直接関係ないのであるが、「クレル」を使用することで、食べるという行為が心理的に自分に影響を与える方向を示すことになる。話し手に向かうのであるから、話し手がどのように感じているかは話し手の主観的な判断にゆだねられるが、例（15）では、それを「うれしい」と表現しているのである。例（15）のような発話を原田（2006）は「間接テクレル受益文」と名付けているが、それは「クレル」の基本が「恩恵型」という前提に立っているからこのような命名、下位分類が発生するのである。「クレル」は、その機能が「恩恵」なのではなく、話者の視点を表し相手や第三者の行為が自分に向かうことを示すことであって、「恩恵」は話し手の状況の主観的判断に過ぎないのである。

次の例は話し手があきれている様子が滲み出ている発話である。学生相撲のトーナメントに主人公の秋平の大学から応援団がはじめて登場する。その時に横断幕を掲げるのであるが、その「心技体」という漢字を間違って「寝・技・体」と記してあった。観衆の中から「ねえちゃん、それじゃネワザノカラダだぞ！」と野次が飛んで、観客は大笑いとなる。その時に相撲部の顧問である教授穴山が

（16）色々やってくれるな、最近の学生は。　　（『シコふんじゃった』）

と言うのであるが、穴山は学生の応援団に対して批判的ではないにしろ、相撲という試合にチアガールが登場し、テーマソングが流れ、しかも横断幕の漢字も間違っているため、

少し呆れた感じで溜息をついて発話しているのである。ここには上から下へという方向性も「恩恵性」も見受けられない。穴山がその場にいて経験し、学生の応援を「受ける」のであるが、それをどちらかといえば腰を引いた態度で受け取っているのである。穴山の少し呆れた顔と溜息からは、「クレル」が恩恵をもたらしているとは到底考えられない。

「クレル」は話者の視点が明瞭になり、話し手に向かうベクトルを示す、という特徴があるため、発話によっては結果的に自己中心的な考えを強調する結果となることもある。

（17）かばってくれようともしなかった。　（『Shall we ダンス？』）

（18）おまえはだまって泊めてくれりゃいいんだよ。　（『プロデュース』）

例（17）は、映画「Shall we ダンス？」の中で舞というダンサーが過去のダンス大会で転んでしまうのだが、パートナーがその転んだ瞬間何もしてくれなかったと非難しているのである。例（18）は、主人公が友達のところへ逃げるのだが、友達がいろいろ説教じみたことを言い出した時に発した言葉である。どちらの例も、話し手にとって相手の行為が自分に向かうことが当然であるという期待が見られる。相手が自ら進んでする行為を受ける場合には、受け手がそれを恩恵と感じられる可能性はあるが、これらの例では自分の期待通りに相手が動くことが前提となっているため、例（17）ではその期待が裏切られたという否定的感情が「クレル」によって強調されており、例（18）では、その期待を押し付けている様子が「クレル」によってさらに強調されている。このような例においても、「クレル」が否定的感情を所有しているわけではなく、発話の意図とそれが現れた状況から話し手の否定的感情は充分表現されているのであるが、「クレル」のベクトルがその否定的感情を強調していると筆者は考える。

次に「クレル」の起源である「上から下へ」という意味が現代日本語にはどのように使われているかについて考察する。

2.「クレル」の起源「上から下へ」の現代語への適用

第II節で説明したように、「クレル」は元々身分の上位から下位への何かを授与するという意味で使用されていたが、時代が下るにつれて対話者を上位に置く待遇表現として使われるようになったという。「クレル」の機能は「恩恵性」であるとする従来の研究では、話し手が自身を下位扱いにすることで、「上位者の恩恵」（日高，2011）を受ける形を取るので、「クレル」はポライトネスにおける「対人機能」（山本，2003）を持つと考えている。しかしながら、この分析には、「上から下へ」という「クレル」である語彙が持つベクトルと、「恩恵」という話し手の主観的な判断、つまり現象が起きてその結果感じる心理、の二つの異なる分野の事柄が同レベルで扱われている。

繰り返しになるが、「クレル」そのものには「恩恵性」という個人の主観的な心理は本来備わっているのではない、というのが筆者の考えである。しかし、「クレル」の起源である「上位から下位へと授与する」という語彙上の意味は現代日本語にも残っていて、そ

れを利用することで「恩恵」や「非難」、「皮肉」という語用論的意味を強調できる、あるいは明確にするのではないかと考える。「クレル」が「恩恵」や「皮肉」を所有しているのではなく、話し手の主観的な判断である「恩恵・皮肉・批判」を表す時に「クレル」を使用することで、それらの判断を強調的に使ったり明確化したりすることができるのである。例えば、

（19）花子さんが手伝ってくれて、ほんとに助かりました。

（20）一緒に行ってくれないかなあ。ひとりで行くのはちょっと怖くて。

例（19）では、「手伝い」を受けた話し手が自分を下位に置くことで、「上から下へ」というベクトルがありがたいものであると話し手が判断し、それが話し手の「ほんとに助かりました」という言葉になっている。この時「クレル」はその「恩恵」を強調する役割を担う。「クレル」が「恩恵」を表すのではなく、話し手が「恩恵」と判断した結果、その判断を強調しているのである。例（20）は依頼文である。人に依頼するときに自分を下位に置くことで、相手への待遇を示しているのである。

一方で、「クレル」の「上下ベクトル」は、否定的感情を表す発話に使われると、その否定的感情を強調する役割を担うこともある。

（21）キミ、早まったことをしてくれましたねえ。　　（『相棒』シーズン3，＃10）

例（21）は、特命係の杉下右京が部下の神戸（かんべ）に発した言葉である。神戸が監察課に不法的に入り込んで犯罪の証拠となり得るUSBを持ってきたのだが、それが上部に知れることになり、杉下が神戸を叱る場面である。杉下のねばっこい言い方と部下にも丁寧語を話すことでこの発話は皮肉を込めて相手を批判していることになる。ここでの「クレル」は文法上の使用義務はないが、あえて使用することで杉下の批判が一層の効果をあげている。

「クレル」は上から下へと授与するという方向性を示すが、例（21）では、話し手（杉下）が自分をわざと下位に置き、そして聞き手（神戸）を上に置き、その上位から「早まったことをした」という行為を話し手が受け取ったという形を取っている。つまり、相手を批判するために、相手がした行為は話し手を下位扱いした、貶めた、ということを暗示しているのである。その結果、批判を効果的に表現している。この場合、二人の社会的対人関係（上下関係）は関係ない。「クレル」の持つ「上から下へ」というベクトルを利用して、相手への批判を強調しているのであって、このような批判は対人関係に関係なく使用できる。例えば、

（22）階級章が重いとはよく言ってくれたものだ。　　（『撃てない警官』：p88）

例（22）は、福島という警官が同僚の柴崎の胸についている階級章に触れて、「これ、重そうだなあ」と言ったことに対して心の中で吐いた言葉である。同僚ではあるが、柴崎の方が先に二階級昇進し、それを福島は皮肉っぽく揶揄するようになる。これはその一場面である。例（22）における「クレル」は恩恵でも対人関係を示すものでもない。柴崎が福

島の言った言葉があたかも上から下に与えられたかのように扱うことで「あいつは俺を貶めた」という形を取り、その結果批判の言葉を心の中で発したのである。一見感心したかのような発話によって皮肉という効果を同時にもたらしている。

「皮肉」とは、「褒め言葉を使って丁寧にしかし批判するあるいは批判を暗示する」（Barbe, 1995: 89）と定義されているが[4]、それは相手の反撃を阻止する効果がある。表面上は少なくとも賞賛しているからである。例（23）は、杉下が幹部にものともせず幹部のやり方が間違っていることを指摘した時に、傍にいた捜査第一課の刑事が言った言葉である。

（23）よく言ってくれました。　（『相棒』シーズン3，#10）

杉下の発言で、幹部が怒り、それは後には捜査一課の刑事たちにも影響が及ぶ。そういう組織の実情が背景にあり、また発言した刑事の表情は苦々しいという感情をむき出しにしているし、言い方も憎々しげである。皮肉の典型的な例であろう。

この例も、話し手が杉下の発言が自分にも影響が及ぶという「受け手」として捉え、話し手自身を下位に置くことで、貶められたというスタンスを取っている。このように褒めることで相手に皮肉を言うという環境では、「クレル」の「上から下へ」という方向は否定的にしか作用しない。皮肉の中で「クレル」を使用することで「自分に迷惑が向かってくるのだ」と相手に宣言しているのである。

さらに次の例では、「クレル」は相手への非難を強調する役割を担っている。この場合にも「クレル」の使用は文法的に義務付けられていない。話し手の否定的感情を強調する役割として利用されているだけである。

（24）こんなに汚してくれて。どうしてくれるのよ。

（25）よくもなぐってくれたわね。

例（24）（の前半の発話）と（25）は、相手がした行為を非難しているのであるが、どちらも「クレル」があってもなくても非難の発話であることには変わりない。しかし、「クレル」を使用することで、相手を上位に見立てて話し手が下位のスタンスを取ることで、その下位に貶めた原因は相手である、と暗示し、それが非難感情を強調する効果をもたらしている。例（24）の「どうしてくれるのよ」では、「クレル」は相手に何かをしてもらうことを自分から権利として強要する形を取っている。話し手は自分を一応下に置きながら、下から上に向かって脅しているのであるが、結果として相手をなじる発話となっている。

次に「上から下へ」という方向を話し手から相手、あるいは第三者に向けた発話について分析する。

4）しかし、Kumon-Nakamura et al.（1995）は、事実を描写する時にそれを大げさに言ったりバカ丁寧に表現したりすることでも皮肉を達成でき、また相手の行為は迷惑なのにその行為を助長することを言うことでも皮肉を伝えることができると、皮肉の方法は必ずしも褒めて反対の意を伝えるばかりではないことを指摘している。

（26）そんな頼みごと、断ってくれるわ。

（27）それ、こうしてくれるわ。（『影姫』）

（28）私がいたらとっ捕まえて出刃包丁で八つ裂きにしてくれたのに。

（『美味しんぼ』85：4話前篇）

この「クレル」は、元々古代に、話し手の身分が上で身分の下の相手に授与するときに使う言葉であったものを、同じように話し手が上位というスタンスを取り相手や話題の第三者を下位と見立てて使用しているのである。例（26）では「断る方向」（第三者、頼んだ人）を下位に見立てて、尊大に発話しているのである。例（27）は、時代物の漫画で奈津姫の影の役をする女性がだんだんと主権を取るようになったため、奈津姫と乳母とで仕置きをする場面である。身分の差というよりは、この場面では奈津姫が優位に立つので相手を仕置きの対象として下位として扱っている。例（28）は、漫画「美味しんぼ」の主人公の家に強盗が入るのであるが、お金も取らずに逃げていってしまった後、主人公の家に手伝いに来ているチヨという豪傑女性がその話を聞いて憤慨して発した言葉である。「クレル」を使うことで、話し手が上位に立ち、強盗を下位扱いにして、こらしめてやったのにという強い感情を明確化している。いずれの場合も、「クレル」を使うことで話し手が上位のスタンスを取り、相手や話題の第三者を下位扱いにするのであるが、それは話し手が持つ憎悪や怒りなどの否定的感情の対象を軽蔑的に扱う効果をもたらす。

V　終わりに

本稿では、「クレル」について従来の「恩恵性」を基本とする説に対して疑問を投げかけ、否定的な意味を持つ発話の例をもとに「クレル」の本来の役割について考察した。「クレル」は日本語の話者の視点を表す言語単位のひとつである。話者の視点は、日本語の構文を構築する際にバックボーンとして機能し、対象となる現象を話者の視点から眺めてそれを言語に表すので、話者の視点は文法的要素である。「クレル」はそういう話者の視点から眺めて現象が話者に向かうベクトルを表す。その結果、話し手が自分に向かってきたものあるいは向かってくるかのように捉えたものに対して、どのように判断するのか（批判、恩恵、感謝、皮肉、非難など）は、コンテクストや話し手の意図によって理解できるのであって、「クレル」そのものがそういう主観的判断を直接伝えるのではないと筆者は考える。「クレル」という語彙に「恩恵性」が本来備わっているわけでも、また「クレル」が対人関係を微妙に表すわけでもない。どのように（主観的に）判断するのかは話し手に任されているのであり、「クレル」の利用によってその主観的判断が強調されるに過ぎない。だから、「クレル」が文法的に使用義務がない構文で使われると、話者の意図が一層明確になり、話者の主観的判断がより強調される効果をもたらす。

本稿ではあまり触れなかったが、「クレル」構文には「てくれる」という補助動詞が文

法上義務化されている場合とされていない場合とがある。それは恩恵や否定的心理に関わらず、使われる動詞が意味する行為の特性や方向性などに起因があると思われるが、これについてはさらなる分析が必要だと思われる。今後の研究課題としたい。

参考文献

Barbe, Katharina（1995）*Irony in context*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Barke, Andrew（2011）Situated functions of addressee honorifics in Japanese television drama. In B. L. Davies, M. Haugh & A.J. Merrison（eds.), *Situated Politeness*, London: Continuum International Publishing Co., pp111-128.

原田登美（2006）「恩恵・利益を表す＜授受表現＞と＜敬意表現＞の関わり：特に『てくれる』を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る」甲南大学紀要「言語と文化」10巻，pp203-217.

Hasegawa, Yoko（2015）*Japanese – A linguistic introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

橋元良明（2001）「授受表現の語用論」月刊言語，4月号，Vol. 30，No. 5，pp46-51.

日高水穂（2007）授与動詞の対象方言学研究．ひつじ書房.

日高水穂（2011）「やりもらい表現の発達段階と地理的分布」日本語学30-11，pp16-27.

井出理沙子・イムヨンチョル（2001）「人と人を繋ぐもの」月刊言語，4月号，Vol. 30，No. 5，pp42-45.

Ishiyama, Osamu（2009）'A note on Matsumoto regarding Japanese verbs of giving and receiving - Discussion note'. *Journal of Pragmatics*, 41, pp1061-1065.

Jautz, Sabine（2013）*Thanking Formulae in English – Explorations across varieties and genres*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S. & Brown, E.（1995）How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 124, pp3-21.

前田冨祺（2001）「『あげる』『くれる』成立の謎」月刊言語，4月号，Vol. 30，No. 5，pp34-40.

益岡隆志（2001）「日本語における授受動詞と恩恵性」月刊言語，4月号，Vol. 30，No. 5，pp26-32.

益岡隆志（2007）日本語モダリティ探究．くろしお出版.

松尾貴哲（2013）「命題態度への意味論的制約－日本語補助動詞『テクレル』の場合」神奈川大学人文研究179，pp13-53.

メイナード泉子（2001）恋するふたりの感情言葉：ドラマ表現の分析と日本語論．くろしお出版.

宮地裕（1999）敬語・慣用句表現論：現代語の文法と表現の研究（二）．明治書院.

森英樹（2015）「『くれる』の求心性動詞化：give との対照研究」福井県立大学論集第44号，pp25-39.

森勇太（2016）発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究．ひつじ書房.

森田良行（1995）日本語の視点：言葉を創る日本人の発想．創拓社.

Obana, Yasuko（2000）Understanding Japanese: A handbook for learners and teachers. Tokyo: Kurosio Publishers.

荻野千砂子（2007）「授受動詞の視点の成立」日本語学会，日本語の研究，3-3，pp1-16.

Okamoto, Shigeko（2009）Politeness and perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol*, 17, pp119-139.

李晶（2013）「授受表現の成立・発達の意味」筑波日本語研究，18，pp28-46.

豊田豊子（1974）「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」東京外国語大学　日本語学校論集

Collected Papers of the Japanese Language School, No. 1, pp77-96.
山田敏弘（2011）「類型論的に見た日本語の『やりもらい』表現」日本語学9月号，Vol. 30-11，4-14.
山橋幸子（1999）「受益表現『（－て）くれる』の機能と日本語教育」比較文化論叢4，pp79-96.
山本裕子（2002）「『テクレル』の機能について―対人調節的な機能に注目して」「言語と文化」3号，名古屋大学国際言語文化研究科，pp127-144.
山本裕子（2003）「授受補助動詞の対人的機能について」名古屋女子大学紀要（人・社）pp269-283.

例文出典

ビデオ

『相棒』シーズン3，#10

『シコふんじゃった』周防正行監督

『Shall we ダンス ?』周防正行監督

小説

曽根圭介　『天誅』光文社文庫「日本ベストミステリー選集：現場に臨め」pp359-397.

佐野洋　『爪占い』光文社文庫「日本ベストミステリー選集：現場に臨め」pp273-318.

安東能明　『撃てない警官』光文社文庫「日本ベストミステリー選集：現場に臨め」pp59-101.

シナリオ

丸山昇一脚本『荒神』日本シナリオ作家協会2015年度1月号

丸山昇一脚本『プロデュース』日本シナリオ作家協会2015年度1月号

コミック

楳図かずお『影姫』講談社漫画文庫

『美味しんぼ』第85巻、第4話前篇

授受表現「クレル」を使った皮肉・非難表現について

―「クレル」の恩恵性を再考する―

尾　鼻　靖　子

「くれる・もらう」などのいわゆる授受動詞や補助動詞は、従来「恩恵性」を基本的に所有していると見なされてきた。また授受表現には話し手が自分を下位に置くことで相手を持ち上げる特徴があるとして、一種の待遇表現として扱い、上位者から恩恵を授与されるという解釈が一般的である。

本稿では、授与動詞「くれる」及び補助動詞「てくれる」（以下「クレル」と記す）を使用した皮肉、非難、批判を表す発話を基に、果たして「クレル」の基本は恩恵であるのかどうかを考察する。

筆者は、「クレル」には「敬意」や「恩恵」「感謝」などの価値判断や主観的判断というのは本来備わっているものではないと考える。そういう判断は話し手が「クレル」構文を取り巻く状況（場面、立場、対人関係）と話し手の意図により結果として発生したものであって、「クレル」そのものは話し手の視点を表し、事象が話し手に向かうベクトルを示す文法要素であると考える。このような文法要素と話し手の主観的判断という心理とを同じレベルで扱い、「恩恵性」が「クレル」の機能であると考えるのは問題がある。

一方で、「クレル」の起源である「上から下へと授与する」という語彙上の意味も現代日本語にも存続しており、その意味を利用することによって、話し手の主観的判断である「恩恵」「皮肉」「非難」「批判」が強調されることもある。「上から下へ」という意味が必ずしも「上位の恩恵」ではなく、非難を表す場合に「クレル」を使用して、話し手がわざと自分を下位に置くことで、聞き手（あるいは話題の第三者）が自分を貶めたという形を取り、それが非難の意味合いを一層強調することもあるのである。

ゆえに「クレル」は話し手の主観的判断（恩恵、皮肉、非難など）を強調したり明確化する役目を担っており、それは「クレル」の「行為が話者に向かう」「上から下へ」という特性に起因すると結論する。